

『O
—キユウ—
』

作 イイジマシヨウタ

登場人物

クエル ……小説家。殺し屋達に拉致されて強制的に続編を書かされる

キャプテン ……殺し屋。男。新しい殺し屋を育てて組織を結成する。常に仕切りたがる

アガサ ……殺し屋。男。短気、短慮。ある疑惑を持ちクエルに話を持ち掛ける

ドル ……殺し屋。会計士。女。男癖が悪く全方位に唾をつけていく

ルーキー ……殺し屋。若い男。彼はスカウトされたわけではなく自ら組織に入りたいと
キャプテンに頼む

キディング ……殺し屋。若い女。元はコメディアンであり口数が多く、こざかしい

マニア ……殺し屋。組織のドクターでありウイルス学者。女。キディングのファンで
ある

オールド ……殺し屋。二重人格で殺し足りない若き頃の凶暴な人格が時々顔を出す

マーカス ……捕らえられた警官。喋るなどという事をすぐ喋る。彼もまた、秘密を握る

S 1 パーティ会場

大勢の参列者で賑わい、全員が酒の入ったグラスを握っている。

一同の拍手と共に「クエル」が入ってくる。中心に入り止まる

クエル

「この顔を見せるのは初めてなんだ。小説家には見えないって？同感だ、僕もそう思うよ。でも、まずはこの本にゴーサインを出した頭のおかしい担当者、それから今回の賞を授けてくれた頭のおかしい選考委員。そして、手に取って喜んでくれたイカれた読者のみんな。ありがとう。全員のイカれた選択が僕をここに導いてしまった。ご愁傷様」

参列者達、笑う

クエル

「とにかく感謝してる。そしてなにより、赤ん坊の母親になる妻へこの場から伝えるよ（指にキスをして上げる）愛してる。でも、しばらくはこの本は見せるな。殺し屋に捕まった男が暴れる話なんて教育に悪い。そして、最後に、ここへ立つ事を許してくれた弟にも帰ったら礼を言わないと。それじゃあ、グラスを（上げる）。全てのクレイジーに」

一同

「クレイジーに」

一同が酒を口に含む。

と、その中の一人の男がクエルに近づく。男の手にはグラスと一冊の本

男

「素晴らしい、握手を？（手を差し出す）」

クエル

「もちろん（手を返す）」

男

「・・・サインを頂いても？」

クエル、快く手を差し出す。

男、すぐに本とペンを渡す。

クエル、本にサインを書き始める

男

「スピーチも冴えてた、素晴らしかったよ」

クエル

「二度とごめんだよ、僕は人前に立つべき人間じゃない」

クエル、サインを書き終え男に本とペンを返す

男

「何を言ってる。（本を上げ）君は偉大な物語を与えてくれたんだ。教えてくれ、

「どうやったらこんな本が書けたんだ？」

クエル 「秘密にしとくよ。あなたは？」

男 「実は是非とも君に書いてほしいアイデアがあつてね」

クエル 「どこの出版社のー」

男 「そういった者じゃない」

クエル 「(わからず首をひねる)」

男 「どうして今回の小説を？何故、殺し屋達の話なんか」

クエル 「(酒を飲む) さあ」

男 「殺し屋達に囲まれた男が抗う姿勢には思わず体が震えたよ。奴らを倒して逃げ出す場面は特に素晴らしい。まあ、実際は叶うわけがないが」

クエル 「・・・」

男 「『X』、実に簡潔でいい。思わず口にしたくなるタイトルだ」

クエル 「すまない、他の方にも挨拶をしなきゃ。仕事の依頼なら僕のエージェントに連絡

してくれ (移動しよう)」

男 「必要ない」

クエル、どういう意味だと振り返る。

と、男がグラスを指で弾いて鳴らす。

すると、ピタッと参列者の動きが止まり、騒がしかった会場が静まり返る。

そして、一斉に去っていく

3

クエル 「・・・」

男 「愛想を振りまく手間は省けたろ。そういうのは馴れていないようだから」

クエル、身の危険を感じて立ち去ろうとするも足がもつれてふらつく。

視線を酒に向け、事態に気づくと男を見る。

男、彼の酒には何も入っていないように一口飲んで微笑む。

クエル、立っていられずそのまま倒れていく。

男が彼のグラスが割れないよう寸前キャッチする。

クエル、完全に床に倒れ込み、そのまま気を失う。

男、グラスについたシャンパンの雫を振り払う

× × × ×

S2 彼らが用意した場所

部屋の中央部分にサークルが敷かれている。

円の中心には机と椅子が設置されている。

また、机の上にはPC、椅子の下には箱が置かれている

ハエが一匹飛んでいる。

サークルの中にクエルが倒れている。

クエル、しばらくすると目を覚まし起き上がる。

彼の前には先程の男が。ここから、彼を「キャプテン」と呼称する。

さらに、周りを見渡すと6人の男女の姿が。

威圧的な印象がある「アガサ」、

見定めるような目でクエルを見つめる「ドル」、

一歩引いたような立ち振る舞いの「ルーキー」、

今にも喋りたそうに口をモゴモゴさせている「キディング」、

他よりも一回り年齢が上に見え落ち着きを払う「オールド」、

あまり興味を示していない「マニア」。

クエル、立ち上がり強引にサークルを飛び出そうとする

キャプテン「ようこそ、偉大なる小説家、我らのクエル・Jバートン。また会えて光栄だよ」

クエル 「出口はどこだ」

アガサ 「(指さして) あそこに」

クエル 「帰らせろ」

キディング 「もちろん」

ルーキー 「2日後に」

キャプテン 「皆、私話す。これは断じて誘拐では」

オールド 「慎重に接するべきだ、怯えてる」

キャプテン 「助言をどうも」

クエル 「金が目的か」

ドル 「払うのはこっち」

キャプテン 「慎め、私が話す」

ハエが飛んでる

キャプテン 「すまないね、私も含めて彼らは君のファンなんだ。話したくて仕方がない」

クエル 「金じゃなきゃ俺に何を」

キャプテン 「言っただろ、アイディアがあると」

クエル、立ち去ろうとすると全員が焦り声を出して止める

キャプテン 「君にとっても悪い話じゃないよ。銃をしまえ」

アガサ、一人だけ出していた銃を上げる
クエル、その声で銃に初めて気づく。あまりの事に椅子に座る

アガサ 「(しまいながら、得意げに) 聞く気になった」

クエル 「(キャプテンに) 頼むよ、俺には家族がいるんだ。もうじき赤ん坊だってー」

キャプテン 「(Xの本を出し) 君に、この本の続編を書いて貰いたい」

キディング 「私たちをモデルにね」

キャプテン 「(話すなどシツシツと歯の隙間から息を漏らし) 手荒な真似はしたくなかったが説得力は出たはずだ。信じてもらう為に君が書いた本の主人公と同じシチュエーションを用意した」

クエル 「(二人一人見渡して)・・・これはプロモーションか何かか？」

オールド 「(穏やかに) もつたいぶるのはよそう。じゃないと彼がかわいそうだ」

キャプテン 「私のやり方がある」

オールド 「(と、まるで人が変わったように) 知るかよ」

キディング 「自己紹介も済んでない」

キャプテン 「進行係は私だと二時間前に説明しただろ、君達は口を閉じててくれ」

クエル 「あんた達は誰だ」

キャプテン 「よし、わかった。教えてやろう、我々はー」

マニア 「殺し屋よ」

キャプテン 「(あまりの怒りに両手の拳で頭を挟む)」

クエル 「冗談だろ」

ハエがキャプテンの周りを飛び回る

キャプテン 「(何とか落ち着きながら) 君の本に感銘を受けてね。是非、我々をモデルにした『X』の続編を書いてほしい。金ならいくらでも払う。ただし、期限は・・・」

(ハエを掴む) 2日

クエル 「・・・」

キャプテン 「選択肢はないぞ」

クエル 「・・・誰か人質に？」

キャプテン 「まさか。できる限り君には自由を与えるつもりだ。携帯だってある。好きに連絡も取ったらしい」

クエル 「・・・」

キャプテン 「ただし、ルールをいくつか設けた。(指を一本立てて) 必ずモデルは我々に。(二本目の指を立てる) そのサークルから決して出るな。踏み出せばー」

キャプテン、ハエを円に向かって投げる。

線の真上で「バチッ」と音が鳴り、ハエが焦げて床へ墮ちる

キャプテン「私でも耐えられない電流が体を通り、君は死ぬ」

クエル「・・・」

キャプテン「(三本目の指を立てる) 締め切りは2日だ。タイマーを設定したから時間が

来れば自動的に電流は落ちるようになってる。書ききればそのまま家族の元にも帰れる。が、間に合わなければその時は君を、殺す」

クエル「・・・」

キャプテン「腹が減ったら(机の下の箱を指して) その中の物を好きに食べてくれ。酒も

あるぞ。大丈夫、“次”は何も入っていない。さあ、仕事の前にいつものやつだ」

殺し屋達、キャプテンの言葉に乗り気ではない

キャプテン「恥をかかすな、大仕事だ気合を入れろ。さあ、いくぞ、殺し屋社訓。どんな事態も」

アガサ「クールに」

ドル「対処」

キャプテン「仲間は」

ルーキー「尊重」

キャプテン「&」

オールド「リスペクト」

キャプテン「侮辱などは」

キディング・マニア「許さない」

キャプテン「殺し屋」

一同「(手を上げて) 最高」

キャプテン「殺し屋」

一同「(手を上げて) 無敵」

キャプテン「裏切り、失敗」

一同「(手を振って) ありえない」

クエル「いつもそれを?」

アガサ「やばいよな」

キャプテン「褒めるなよ、(自慢げにクエルに) 私が考えた。さあ、先生(箱に指を差して)

今の時刻を教えてください」

クエル、箱の中から携帯を取り出し時間を確認する

クエル 「・・・(アガサに) 朝の10時」

キャプテン 「ありがとう。それじゃあ、2日後の朝10時が傑作のバースデーだ」

クエル 「(諦めるような素振りをして)」

キャプテン 「素晴らしい！交渉は成立した！堅苦しい契約はしまいだ。ここからは君の独壇場、前作では我々の世界を空想でしか書けなくて困っただろう。だが、今からは本物を君に与えよう。自己紹介だ」

アガサとドルがクエルの前に立つ

アガサ 「アガサだ。(拳銃を見せびらかすように出し)好きな物は簡単に単純なものだ。

こいつはいい、撃てば死ぬし仕留めなきゃ俺が死ぬ。嫌いなものは、信用だ」

ドル 「ドルよ。会えて嬉しい。あなたの小説は殺し屋にとっての聖書よ。「人は飯を食い、金は人を食う」ってセリフ最高。会計士の私にはぴったり」

キディングとマニアがクエルの前に立つ

キディング 「あたしキディング。彼女は」

マニア 「マニア」

キディング 「せっかく会えたんだし、ジョークでもどう」

マニア 「笑えるわよ」

キディング 「彼女、あなたの事もお気に入りだけど私のジョークのファンなの。彼女は医者で学者よ。一日中、人の腹の中とウイルスをいじってた」

マニア 「私の事はいい。主役はあなたよ」

ルーキーとオールドがクエルの前に立つ

ルーキー 「ルーキーです。参ったな本物だ！『X』は一字一句漏れず全て頭に入れました！

これからも新作を読み続けたいので是非、がんばって書き上げてください」

オールド 「オールドだ。見ての通りおんぼろだ。(ルーキーに顔を向けて) 若いのと違ってこの仕事が私の最終章だ。少しでも君の本にこの人生が乗ることを楽しみにしているよ、以上だ」

二人が戻ろうとすると、まるで引っ張られたかのようにオールドが戻る

オールド 「(人がまるで違って)次は俺だ!俺から言わせてもらえばプロログも終わっちゃいない。弾はまだ残ってるんだ。殺って殺って殺りまくろう。先生、時間切れの時は俺がお手手からぶち込んでやるよ・・・(戻って)すまない、稀に戻ってしまうんだ。昔に」

続いてキャプテン

キャプテン 「私はキャプテンだ、皆そう呼んでいる。さて、おかしな連中ばかりだが間違はなくプロだ。我々はお互いに尊重しあうチームなんだ。採めるな、ミスるな、裏切るな、それが我々の信条だ。そして、この2日だけは君も一員だぞ。なあに、潜入取材だと思えばいい。さあ、仕事だ」

携帯が鳴る。クエルが画面を見てキャプテンに顔を向ける。

キャプテン、もちろんだと頷く

キャプテン 「プライベートは尊重しよう(耳を手で塞いで)」

クエル、電話に出る。

一同は耳を塞ぎ、クエルが何を喋っているかはわからない。

クエル、やがて電話を切る

キャプテン 「では、クエル、聞かせてくれ。君の次回作のタイトルを」

クエル 「・・・」

キャプテン 「素晴らしい!」

クエル、遂にPCを開き。殺し屋達は彼のタイピングの音に踊る

タイトル『Q』

暗転

Q1『Where? —どこからきた (The Mystery)』

S3 彼らが用意した場所―事務所 (回想・夕)

クエルが殺し屋達の話を聞いている。

事務所でドルが電卓で金を計算している

クエル 「元は、ホワイト、な会計士を？」

ドル 「スカウトされるまではね」

ドル、金の一部を服のポケットにしまう。

と、後ろにキャプテンが立っている

ドル 「全部バレてた。私が金に困ってた事も会社の金に手をつけていた事もね。それを知って彼は―」

キャプテン 「チームに入るかい」

ドル 「嫌と言ったら？」

キャプテン 「テストを受けなければいい」

ドル 「テスト？」

キャプテン 「君の悪事をここの警備に伝えた。逃げれば合格だ」

ドル 「・・・」

キャプテン 「君以外にも、逃亡者がいる。いい出会いになるかもしれないぞ」

ドル 「・・・」

キャプテン 「(Xを見せて) X、第一章、11ページ、四行目にこう書いてある。『人は飯を食い、金は人を食う』。今度は君が金を食え」

キャプテン、去っていく

クエル 「君一人でよく逃げきったな」

と、アガサ、入ってくる

アガサ 「俺が助けた」

ドル 「運命としか言えない」

アガサ 「俺は飲み屋での揉め事がきっかけでつい一人を殺っちまったんだ。その時にあの仕切りたがりが出てきた。俺も捕まりたくはなかったからな、奴のゲー

ムに乗ってやった。それと人を殺した気分は、そう悪くはなかったよ。(ドルを指して) こいつとは逃げてる最中に会った」

ドル 「信じられる？この人もあなたのファンだったのよ」

アガサ 「『愛と銃弾には目がない』何故、あんたにはこんなセリフが書けるんだ？どうやって俺には無理だ」

クエル 「どうやって書いたかなんて、わからない」

アガサ 「気づいたら出来上がったって？天才かよ」

ドル 「一つ聞いても」

クエル 「(なんだと顔を向ける)」

ドル 「どうしてスピーチなんかする気になったの？それまで顔も見せない引き籠りだったのに」

クエル 「一度くらいクエルJバードンのファンの顔を見ておきたかったんだよ」

アガサ 「後悔したろ」

クエル 「全くだ」

アガサ 「ドル、次を呼んで来い」

ドル、去っていく。

アガサ、彼も去ろうとするが止まる

アガサ 「小説の中の殺し屋は捉えた男にこう尋ねてる。『もしも、次が人生最後の

仕事になるとわかっていてもお前はそれに取り掛かるか？』。あんたはどうだ」

クエル 「・・・俺はこの仕事に誇りを持つてる。何が起きても書くことを選ぶよ。だけど、本音を言えばどんな手を使おうが最後にはさせない、天職なんだ」

アガサ 「・・・(なるほどと頷いて) あんたなら信用できそうだ。先生だけには話すよ」

と、アガサ、サークルの中心にめがけてなにかを投げる。

途中、“それは”電流で丸焦げになりクエルの足元に着地する。

目玉である。

クエルが用心してそれを広いあげて、確認する。と、思わず驚き落とす

アガサ 「あんたならそれをなんて表現する？俺なら、そうだな・・・シンプルに、犬の

目玉だ」

クエル 「・・・」

アガサ 「殺し屋としての歴は浅いがあの出しゃばりに充分鍛えられた。そのおかげで

俺にも見分ける目がついたんだ。一般人か、同業者か、犬かをな」

クエル 「犬？」

アガサ 「(目玉を差しして) こここそと俺らを嗅ぎまわっていた警官だ。大した度胸だったよ。目玉を取られても口を割らなかつた」

クエル 「何を聞いたんだ」

アガサ 「決まってんだろ、裏切者は誰かだ。俺らは秘密が全てだ、仕事の中身は当日知らされる事になってる。それなのに警官がはりついてたんだよ、開始時刻からしまいまでびつたし狂いなく纏わりつくなんて誰かに告げ口でもされない限り不可能だ」

クエル 「告げ口って？」

アガサ 「俺らの中に警官が一匹紛れこんでるってこつた」

クエル 「・・・」

アガサ 「どうだ先生、一緒に炙りだそう」

クエル 「・・・どうして俺が」

アガサ 「あんたなら詳しく、取材、ができるだろ？もしも、うまくいったらあんたが書き終わらなくとも命は保証してやるよ。俺は単純なものが好きなんだ。簡単な提案だろ」

クエル 「この事を他の誰かには」

アガサ 「(NOと目で知らせる)」

クエル 「・・・わかつたよ」

アガサ 「俺も仕事に悔いは残したくはない。だからいつだってこれが最後の仕事だと思つて挑むんだ。誰であろうと裏切者は許さない」

アガサ、去ろうとする

クエル 「一つ聞いても？」

アガサ 「取材なんだ、遠慮はするな」

クエル 「彼女は どうして会社から金をくすねていたんだ？」

アガサ 「よくあるパターンさ。前の男に貢いでいたんだが足りなくなると会社の金を渡していたらしい。しかも、そのまま逃げられちゃったんだぜ。でもな、面白いのはその男も警官だったって事だ。ありえるか？もしも目の前にその男が現れたら金の代わりにそいつのタマで払ってもらう。最高のオチだろ」

クエル 「警官が嫌いになるな」

アガサ 「俺は奴らの全てを疑つてやるのさ」

クエル 「・・・」

アガサ 「なんだよ」

クエル 「今回ばかりは彼女も疑うか。(目玉を恐る恐る摘み) 誰も、知らないんだろ？」

アガサ 「・・・」

クエル 「それに言っただじゃないか、信用は嫌いだと」

アガサ、一本取られたと去っていく

× × × ×

S4 ライブハウス・ステージ(回想・夜)。

スタンダップコメディのショー行われている

数える程の拍手と共にキディングが上がる

キディング「どうも、どうも。みんな、楽しんでる？ 私は囲まれてて獲物の気分。つまらなくても撃たないでね、荷物チェックの項目に猟銃を加えとけば良かった」

観客にちらちらと目をやってウケてるかをチェックする

キディング「さっそくだけど『お前の脳はイカレてる』って、私の為につくられた言葉だと思う。大抵の人間にそう言われてしまうんだけど、多分私の記憶力のせいね。人より物覚えがいいの。例えば彼の元カノの番号とか、彼の元カノのアドレスとか、彼の携帯をちよこつと見た時に全部覚えたの。勝手に見たわけじゃない、ちゃんと許可だつてとつた・・・彼が飼ってる軍曹って名前のインコに聞いたのよ。返事は、イエッサー」

会場は静まり返る。

キディング、ステージを降りる

× × × ×

S5 同一同・バックステージ(回想・夜)

キディング、とつと帰ろうとする。

と、キャプテンが姿を現し、拍手を彼女に送る

キャプテン「素晴らしい。君のジョークは人の表情を殺す。見てみる(ステージの端から覗き) あそこの客は君の話聞く前は笑いながらワインを口に含んでいたのに今は水を注文してる」

キディング「スカウトかなにか？」

キャプテン「君の才能の割合は1から100に当てはめると0.5%がお笑いで99.5%はその記憶力が占めてる。クイズだ。前方の客席最前列右から二番目の客の服装はなんだった」

キディング「(答える。座っていないなければ空席だと答える)」

キャプテン「後方の客席、前から三列目、真ん中の席の客の特徴は」

キディング「(同じように答える)」

キャプテン「素晴らしい」

キディング「それであんたは何よ。あたしをクイズ王にでもしようってんの」

キャプテン「当てるみる」

キディング「景品は何？」

キャプテン「君に新しいステージを用意する」

キディング「ステージ？」

キャプテン「早くしろと手をやる」

キディング「・・・格好は小さい時に観た映画に出てくる殺し屋にそっくりだけどー」

キャプテン「答えか」

キディング「(首を振る) そんな笑えない答え私が・・・(キャプテンの顔を見る)」

キャプテン「・・・」

キディング「・・・あー、マジ？笑えないけど」

キャプテン「新たなチームを作りたい。プロを集めるのではなく一から育てたいんだ」

キディング「あんたイカれてて面白いよ。このマネージャーに紹介してあげる」

キャプテン、首をひねるジェスチャーをする

キャプテン「残念だ。殺してしまった」

キディング「・・・(恐れるあまり) あえて話にのってあげるけど、銃なんか触った事ないし、すぐやられちゃうのがオチよ」

キャプテン、Xの本を出してページを捲る

キディング「クイズ本？」

キャプテン「X、第一章、65ページ19行目、自分に才能がないと悟った殺し屋の言葉だ。

『登るには骨が折れそうな木の下に二匹のサルがいるとしよう。一匹は木登りをした事がなかったがあつという間にコツを覚えててっぺんに登っていった。

比べて二匹目はいくら日が経とうが木にしがみつので精一杯だ。だが、ある時、上に居座るケツと目が合って気づいたんだ。わざわざ勝ち目のないコースに出ることはないってな。ケツに銃弾をぶち込んで撃ち落とせばそれで済む』

キディング「・・・」

キャプテン「お気に召さなかったかな。要はー」

キディング「本当の才能に気づけば猿も木から落とせる」

キャプテン「(笑う)」

キディング 「やっと笑ったね」

キャプテン 「君にしか作れない笑いがあるように君にしか作れない死がある」

キディング 「・・・」

キャプテン 「このステージは君には少しばかり小さい。正しい景色が他にあるさ」

キャプテン、本を閉じる。

キディング、手を伸ばし催促する。

キャプテン、彼女の手の上に本を乗せる

キャプテン 「怪我の事なら心配ない。その口が吹き飛んでも縫い合わせてくれるさ」

と、マニア

キディング 「冗談でしょ」

キャプテン 「彼女も手術台が正しい景色ではなかったようだ」

キディングがマニアの目を見る。と、諦めたように溜息を漏らす

キャプテン 「逃げるなら今だ、マネージャーには君の指紋がべったりだ」

キャプテン、本の上の手をどかし、去っていく

× × × ×

S 6 彼らが用意した場所（現在）

クエル 「コメディアンが人を殺すのか」

キディング 「私の殺しは、笑える死」

クエル 「その為の特訓を？」

キディング 「休みなく、みっちり。おかげでホットドッグにマスタードしかかけられなくなった」

マニア 「笑える」

キディング 「あんたも大変ね、もうじき子供が生まれるっていうのに」

クエル 「助けてくれるか」

キディング 「いいよ」

クエル 「2日後にだろ」

キディング 「(多少の間) あの男が本当にここから出すとでも」

マニア 「キディング」

クエル 「どういう意味だ」

キディング 「顔を見られて、おまけに素性を明かした人間、ましてや作家を生かす殺し屋がいると思う？」

クエル 「だけどー」

マニア 「ファンなら何でも許すとても？」

クエル 「俺がいなきや、出版はできない」

キディング 「読めれば関係ない」

クエル 「・・・」

キディング 「あたしは助けてあげるよ。条件はたったの一つ」

クエル 「・・・」

キディング 「なに」

クエル 「(本心なわけないが) 君達は殺し屋と言いつつ本当は善人なんじゃないか」

キディング 「(重く受け止めはせず) どういう意味」

クエル 「いや、別に。君なら“信用”できると？」

キディング 「他のよりマシでしょ」

クエル 「俺からすれば全員ともじゃない」

キディング 「まあ、聞いてよ。貴方なら簡単にクリアできる条件のはずだから」

クエル 「・・・」

キディング 「あたしにさ、とっておきのジョークをちょうだい。ベストセラー作家が考えたものならウケるでしょ」

マニア 「やめてよ」

キディング 「私のファンなら、這い上がるとこ見たくないの？」

クエル 「もう諦めたんじゃないのか」

キディング 「その冗談笑えない」

クエル 「あいにく冗談は得意じゃない」

キディング 「謙遜しないで。じゃなきやあんなイカれたものが書けるわけがない」

クエル 「考えとくよ」

キディング、満足そうに去っていく

マニア 「人気者ね」

クエル 「おかげでジョーク一つで助かる」

マニア 「何も思い浮かばない事を祈るわ。私はあの子のジョークが好きなの」

クエル 「君はただのファンだろ、それも医者だ。人を生かす立場の君が何故？」

マニア 「人の事よりもまずは自分を心配したら？」

クエル 「・・・」

マニア 「だけど、同情もしてるのよ」

クエル 「そりゃどうも」

マニア 「あなたの奥さんによ。一番必要な時に隣にいないんですもん」

クエル 「あなたにも子供が？」

マニア 「いえ、医者としての意見よ。おあいにく様、女として私にはその機会は許され
てないの」

クエル 「すまない、なにか聞かなくてもいいことを聞いたか」

マニア 「気にしないで。今の私には大した事じゃないから（去ろうとするが止まり）

その足、よくなって良かったわ、クエル・・・久しぶりね」

マニア、去っていく。

と、ルーキーがすれ違って現れる

ルーキー 「（心底、関心し）さすがプロだ。いきなり書き始めずにまずは俺達の身辺調査

からか。抜かりがないな」

クエル 「これが仕事だ」

ルーキー 「ならこっちもプロとして答えないと。何でも聞いてください。あ、待って、

なんでも答えるので一つだけ教えてもらっても？」

クエル 「手短に頼むよ」

ルーキー 「X、第一章、125ページ、15行目。殺し屋に捕らえられた男の言葉です。

『一つ忠告してやるよ、言葉はカードだと思え。ポーカーをする時と同じ様に
一字一句慎重にテーブルに出すことだ。考えもなしになるようになってき
とうやっていると入念に準備をしてきた相手にスキを突かれてあつというまに
ゲームセットだ』・・・散々、殺し屋連中から酷い仕打ちにあってるのに諦め
ないなんて同じ男として尊敬しますよ」

クエル 「所詮、フィクションだ」

ルーキー 「なにかモデルが？」

クエル 「そう思うか」

ルーキー 「仮に違くともあなたの中から生まれたものでしょ？この男の様な強さがぎっ
と先生にもあるって事です」

クエル 「同じ立場になってわかるよ、答えはノーだ」

ルーキー 「（まだ信じていないようだ）」

クエル 「質問に戻っても？」

ルーキー 「もちろん」

クエル 「君も“キャプテン”からオファーを？」

×

×

×

×

S7 ダイナー(回想・夜)

席に座るキャプテン。Xを読みながら誰かを待つ。

ルーキーが入ってくる。キャプテンの前の席へ腰を降ろす

ルーキー 「何も食べてないのか」

キャプテン 「チキンステーキを9枚。今10枚目を注文しようか迷っていたところだ」

ルーキー 「遅れてすまない、呼び出したのはこちらなのに」

キャプテン 「要件を」

ルーキー 「仲間に入れてくれ」

キャプテン 「私の事はどこで知った」

ルーキー、口を開こうとする。

キャプテン、それよりも早く口を開く。

同時にテーブルの下でキャプテンの銃がルーキーに向いている

キャプテン 「慎重にな」

ルーキー 「・・・いい計画があるんだ。あんたなら絶対くいついてくれるはず」

キャプテン 「君のタマをキッチンで焼いてもらうぞ。動機じゃない。私の事はどこで知った」

ルーキー 「教えてもらったんだ。あんたがチームを作ってるって」

ルーキー、慎重に手を動かしポケットから資料を差し出す。

キャプテン、それを掴もうともう片方の手を伸ばす。

ルーキー、手が届く前に資料を引っ込める

ルーキー 「銃にビビッてそっちには行きたくないってさ」

キャプテン 「・・・」

ルーキー 「俺もこれを渡す以上、リスクがある。取り扱いにはくれぐれも気を付けてくれ」

キャプテン 「・・・」

ルーキー 「ドキドキするな。まるで第1章だ。捕らえられた男が殺し屋に取引をする

場面を思い出さないか？」

キャプテン、思わずテーブルの下の拳銃をしまう。

キャプテン、あくまで視線はルーキーに向けたまま資料を受け取る

ルーキー 「俺はあんたと同じXの大ファンなんだ」

キャプテン 「(資料を上げて)これがお前の動機か。イカれてるぞ。作家を誘拐する為だけ

に殺し屋になるのか」

ルーキー 「スター・トレックを観てNASAを目指す人間だっている」

キャプテン 「・・・(仕方ないと頷く)」

ルーキー 「(握手をと片手を差し出し) 信用してくれるのか」

キャプテン 「(だが、返さない) これからの働き次第だ、“ルーキー”」

ルーキー 「(同意の頷き) 今度はあんたの動機を聞いてもいいか」

キャプテン 「私の方？」

ルーキー 「素人ばかり集めてどうすんだよ、初めからプロを引き込めばいい」

キャプテン、テーブルの上のXを指でルーキーの方へ押す

キャプテン 「X、第一章、129ページ、46行目だ。戦士は戦いの中でスタイルを見つけ

ていく。だが、時にそれが鎖となり首を絞めて死をもたらす。つまりー」

ルーキー 「いつでも自分のやり方を疑い新しい道を見つけろ、だろ」

ルーキー、Xに指を乗せてキャプテンの方へ押し返す

キャプテン 「話が早いな」

ルーキー 「あんたの新しい道って？」

キャプテン 「新たなファイターを見つけたい。プロにはない斬新なものをもつ人材を」

ルーキー 「素人の中にいるとは思えない」

キャプテン 「確かに殺し屋はアルファベットを覚える前に首の締め方を覚える生き物だ。

素人では当然敵わないスキルを体に叩きこみ“殺し”こそを人生にしてい

ルーキー 「なら、俺らが入る隙間なんてないだろ」

キャプテン 「匂いがとれないんだよ」

ルーキー 「匂い？」

キャプテン 「プロの匂いさ。我々は目をいつも細め、人を疑う。いくらそれを隠そうとも

プロはそれに気づくのか。同じ穴のムジナだと

ルーキー 「・・・」

キャプテン 「染みついてしまっているからもう落とせないんだよ。だが、ただの庶民であれ

ばどうだ？今までの暮らしでついた匂いで新しいものを隠せるかもしれない」

ルーキー 「スカウトした人間が全てそうなる」と

キャプテン 「そんな甘くはないさ。一人生き残れば収穫だ」

ルーキー、用は済んだと立ち上がる

ルーキー 「俺にも匂いがついてるか」
キャプテン 「ああ、べったりな。しつこいファンと気づかれたら嫌われるぞ。隠せ」

ルーキー、気をつけるよと笑い、去っていく

× × × ×

S8 オールドの住処(回想・夜)

キャプテンが部屋を見渡している。

彼の背後からオールドが現れる

キャプテン 「こんな片田舎で余生とはとてもじゃないが伝説の殺し屋だった男とは思えないな」

オールド 「要件を話せ」

キャプテン 「新しくチームを組みたい」

オールド 「老いぼれを一員に？教育係なら御免だ」

キャプテン 「いえいえ、まだ現役でしょう」

オールド 「(キャプテンを見る)」

キャプテン 「もう一人の事です」

オールド、顔や佇まいがガラリと変わる

オールド 「・・・仕事のオフアーカー」

キャプテン 「もう一人”はあまり乗り気ではないようだが」

オールド 「引退した気でいやがる」

キャプテン 「あんたはどうだ」

オールド 「俺はこいつと違ってぴんぴんしてるぜ？老人と馬の糞に塗れて死んでいくなんて俺はごめんだね。金はいくら払う」

キャプテン 「とるのか」

オールド 「同じプロとして働くんだから当然だろ」

キャプテン 「いくらとる」

オールド 「たんまりと(変わり) 必要ない」

キャプテン 「あなたの中にいる“同居人”は若かった頃のあなたですか」

オールド 「・・・今の私は昔みたいに自由はきかない」

キャプテン 「自由はもう一人に任せて知恵はあなたが担えばいい」

オールド 「・・・」

キャプテン 「あなた方が分裂した理由を考えてみたんです。リタイアと言いつつあなたは
まだ衰えとかげりを認めていない」

オールド 「わかったような口を聞くな」
キャプテン 「引退結構、気が進まないなら“若いの”に譲ればいい」

キャプテン、去っていく

× × × ×

S9 彼らが用意した場所(夜明け前・現在)

クエル 「いつから“同居”を？」

オールド 「引退と決めて撃った最後の一発からさ」

クエル 「心が銃を離してくれないって？」

オールド 「作家らしい言い回しだな」

クエル 「分裂なんて奇妙な事があるんだな」

オールド 「いいや、他の人間だって違う顔の一つや二つはあるものだ。それが表に出るか出ないのの違いだけだね」

クエル 「俺にはないよ」

オールド 「(変わって)一冊に何十人と詰め込めるじゃねえか。それに本物とここまで堂々とやりあえるのは大したもんだぜ、きつとお前の中にもー」

クエル 「一緒にするな」

オールド 「(変わって) そうだな、子供が生まれるというのに心配しろ」

クエル 「彼女には家族がついてるから心配ない」

オールド、去っていく。

キャプテン、彼とすれ違って現れる

キャプテン 「物語は生まれそうか」

クエル 「今度は小説家が殺し屋を捉え、いくつかの質問をするんだ」

キャプテン 「素晴らしい。一つ目のQは我々がどこから来たか。二つ目のQでは何を聞く」

と、日差しが

キャプテン 「全員が本の完成を待っている。急げよ、一度目の夜明けだ」

暗転

Q2『secret? —秘密 (The Suspense)』

S10 彼らが用意した場所(朝)

クエル、PCで執筆を始めている。

と、ドルが背後を気にしながら入ってくる

ドル 「取材は順調?先生」

クエル 「(その声で気づき、どうかかと)傑作にはまだ遠いよ」

ドル 「大体の作家が続編でしくじってる」

クエル 「肝に銘じとくよ。誰かが都合よく特別なアイディアを渡してくれるといいんだけど」

ドル 「・・・」

クエル 「なんだい」

ドル 「役立つかはわからないけど」

クエル 「ん?」

ドル 「旦那がこそこそ探ってる」

クエル 「・・・探ってるって、なにを」

ドル 「さあ、そこまでは」

クエル 「・・・」

ドル 「先生になら何か話してると思ってたけど、見当違いね」

クエル 「君に話さない事を俺が知るわけないだろ」

ドル 「そうとも限らない。あの人案外お喋りなのよ、人の事になれば特にね」

クエル 「考えすぎじゃないか?ド」

ドル 「バレンティアでいいわ、私の本名。だから、私も呼んでいい?クエルって」

クエル 「別にかまわない」

ドル 「あの人、自分の事何か喋った?」

クエル 「・・・」

ドル 「いつもそうなの。後ろに立って自分は陰に隠れて表には出ない。職業柄ってやつなのかしら。あなたたちは」

クエル 「・・・(どういう意味だと)」

ドル 「旦那、あなたと同じ作家だったのよ」

クエル 「そうなのか」

ドル 「一度読ませてもらったけど一度だけでも後悔したわ。才能がないとすぐわかった。比べてあなたは知的で言葉を楽しんでる。あたし好きなの、そういう男」

クエル 「ドル、彼の作家名はなんだったんだ」

ドル 「え」

クエル 「あの男の作家名だよ」

ドル 「駄目よ、クエル。一方的じゃなくあなたも一回くらい私の質問に答えてよ」

クエル 「・・・」

ドル 「旦那はあなたに何を？本当はなにか知ってるんでしょ？」

クエル 「・・・あんたたちの中に裏切者がいると」

ドル 「なにそれ」

クエル 「ついて回っていた警官がいたらしい。それでそのお仲間があんたらの中に混ざってると言っていた」

ドル 「私の事も疑ってるわけ」

クエル 「さあ、どうだろう」

ドル 「そ」

クエル 「・・・驚かないのか」

ドル 「三流の作家が言うことでしょ」

クエル 「旦那に対しての言葉じゃないな」

ドル 「私は、裏でこそこそする男は好みじゃないの。表で堂々と立つ男が好き」

クエル 「俺は無理矢理連れてこられてきたただだよ、ドル」

ドル 「運命かも」

クエル 「・・・教えてくれるか、なんて作家だったんだ」

ドル 「代わりにもし私が危険な目にあったらあなたがこの体を守ってくれる？」

クエル 「助けてほしいのは俺なんだが」

ドル 「はぐらかさないだよ」

クエル 「バレンティア、約束するよ」

ドル 「本当は別の場所です二人っきりで教えてあげたいんだけどー」

クエル 「今は我慢だ。ここをでたらたくさん話そう」

ドル、口を開こうとする。

が、アガサが入ってくる。

クエル、ドルの目が合う

クエル 「次のQがある。皆を呼んで来てくれるかい」

ドル、去る

アガサ 「さすがに徹夜か、明日まで眠れないだろうな」

クエル、彼の声は耳に入れず作業を進める

アガサ、気に食わないが堪え、ごまかしながらクエルの背後に回る

アガサ 「どうだ、先生」

アガサ、PCの画面をのぞき込もうとする。

クエル、寸前で察してPCの画面を閉じる

クエル 「楽しみは明日だ」

アガサ 「・・・なにかわかったかよ」

クエル 「いや、まだだ」

アガサ 「なに呑気な事をぬかしてる。妻とお喋りもいいが、俺は手を貸してやると言ってるんだぜ。あんたもやる気になってもらわねえとな」

クエル 「締め切りが2日しかない上に連中の相手をするなんて容易じゃない。それに相手は殺し屋なんだぞ。おたくらには銃があるからいいがこっちはテーブルと椅子とパソコンだけだ！」

アガサ 「わかったから落ち着けよ」

クエル 「それに俺と組んだと気づかれたら危ないのはあんたも一緒だろ」

アガサ 「恐れ入ったぜ、人の心配か」

クエル 「うまくやるよ。次は二つ目のOだ」

ドル、一同を連れてくる。

多少の時間経過

ルーキー 「秘密？」

クエル 「作中の人物を深く掘り下げるには必要なんだ。キャラクターを一つの箱だとしよう。その中身が秘密で詰まっていればいる程、物語もより魅力的になる。できるだけうまく多く注ぎ込めれば読者がその箱を空けた瞬間、共感を
得られる」

オールド 「なるほど」

クエル 「モデルがあなた達である以上、答えてほしい」

キャプテン 「依頼を出してる我々に拒否権はない。彼に従おう」

ドル 「なんでもいいの？」

クエル 「もちろん」

オールド 「(変わって) 殺し屋から秘密を奪おうとは度胸あるな、先生」

クエル 「言える範囲で構わない」

キディング 「何が知りたいの」
クエル 「なんでもさ、前作を越えなきゃいけない。協力してくれないかな」
ドル 「(アガサに) 話してみたら?」
アガサ 「なにをだ」
ドル 「あなたが作家だったってこと」
アガサ 「(何を言い出すかと) よせよ」
クエル 「(とぼけて) へえ、そうなのか」
ドル 「(大袈裟に) これだって立派な秘密でしょ」
クエル 「(とぼけて) ああ、初めて聞いた」
キディング 「先生が二人か」
アガサ 「黙れちんちくりん」
マニア 「(すごい剣幕で) ちんちくりんって言わないで!」
アガサ 「喚くなよ」
ルーキー 「どんな本を書いた」
アガサ 「人の事をつつくな、自分の事だけを話せ」
ルーキー 「せめて、作家名だけでも教えろよ。後から読めるだろ」
クエル 「頼むよ、俺も興味がある。同じ作家仲間だろ」
アガサ 「あんたまでよしてくれ」

キャプテンがアガサに目を合わせる。
アガサ、観念して仕方なく―

アガサ 「・・・No2」
クエル 「No2?それが名前?」
アガサ 「ああ、そうだよ」
クエル 「変わった名前だ」
アガサ 「あんたが言うか」
ルーキー 「いや、よく似合ってる。(クエルを見て) “No1”は他にいるしな」
アガサ 「それ以上絡むな、ケツに穴開けるぞ」
ルーキー 「(マニアに) オペの予約を頼むよ」
マニア 「ケツくらいなら治せる」
アガサ 「いいところで割り込んだなドクター、(クエルに) 彼女はあんたの名前を知ってたぜ」
キャプテン 「当然だろ、彼は名が通った―」
アガサ 「そうじゃねえ、クエル・J・バートン。昔に受け持った患者の名前だって言ってたろ、なあ?」

マニア 「だから何？」

アガサ 「さあな。 なにか有益なネタになるかもしれない」

マニア 「知っていても患者の情報は漏らさない」

アガサ 「(クエルを指して) 交渉次第だろ」

マニア 「おあいにくさま、(クエルに目を合わせて) 患者と医者との関係しかない」

キディング 「家に籠ってるのに怪我を？」

クエル 「階段から滑ってね」

ルーキー 「作家ならもつと捻った怪我をしたらどうです」

クエル 「よく言われるが、ホントなんだ」

マニア 「立てるようになって安心したわ」

クエル 「おかげさまで」

マニア 「私は医者だっただけ。何かの当てつけに変にほじくらないで」

キャプテン 「ウイルス学者としてはどうだい」

マニア 「なに？」

キャプテン 「もう一つの君さ」

マニア 「ないわ。持ち帰っちゃならないウイルスを持ち帰っただけ」

キディング 「冗談でしょ」

マニア 「大丈夫、おうちで大人しくしてる」

オールド 「ペットみたいに言うな」

マニア 「(クエルに) ネタにしているわよ。あ、でも私が目立つ事になってしまっから

キディングが盗んだ事にしてあげて」

キディング 「しないでいい」

ルーキー 「先生、逆にあなたが聞きたい秘密は？」

キャプテン 「君が仕切るな、ルーキー」

クエル 「そういえばあんただけ聞いてない」

キャプテン 「私かい？ 一体なにを」

クエル 「殺し屋になる前だよ」

キャプテン 「私は、なにも変わらない。子供の頃、同年代がキャッチボールをしている間、

私は親と手榴弾を飛ばしていた」

ルーキー 「酷い父親だ」

オールド 「よくある話だ」

クエル 「貴方は生粋な殺し屋で？」

オールド 「(変わって) 昔話だ」

キャプテン 「伝説だ」

オールド 「やめてくれ。確かに、強すぎて同業であるはずの殺し屋から何回も命を狙われ

たり確かに、殺し屋は家族を作ればそれが弱みになるが強すぎて弱みになら

なかったり確かに、ニックネームは「ザ・パーフェクト」だったりしたがどれも全て昔ばなしだ」

キディング 「自慢だ」

マニア 「自慢ね」

オールド 「あとはー(変わって)もういい！老いぼれの昔話はごめんだ(変わって)すまない」

クエル 「やはり未練が？」

キヤプテン 「若いには譲れませんか」

オールド 「(クエルに)気にしないでいい。(変わって)続きをしようぜ。

おい、ちんちくりん、残ってるのはお前だけだ。うんと笑えるのを頼むぜ」

キディング 「あー。暴露大会のところ申し訳ないけど遠慮しとくよ」

キヤプテン 「何を言ってる。君ほどのおしゃべりが」

キディング 「やめてるんだよ、人の事を喋るのは」

ドル 「コメディアンでしょ」

キディング 「自分のエピソードで笑いをとりたいの」

オールド 「(変わって)君の話で笑ったことはない」

キディング 「うるさい」

クエル 「人の事はごめんでもジョークは欲しがるのか」

キディング 「・・・黙って」

キヤプテン 「何の話だ」

キディング 「気にしなくていい」

クエル 「笑えるジョークを頼まれた」

ルーキー 「なに？ずるいぞ一人だけ」

キヤプテン 「何の為に」

アガサ 「わかるよ、目の目を見る可能性なんてこれぼっちもないくせに諦めきれないんだ。確かに先生のネタに縋ればうまくいきそうだ」

キヤプテン 「彼への頼み事は一つだけだ。先生を困らせるな」

キディング 「あたしだって必死なの」

アガサ 「そこまで姑息に売れようとは思わねえよ」

キディング 「だからあなたの本はクソなのよ」

オールド 「(言ったぞと煽るように声を上げる)」

ドル 「読んだことないのに言ってるんじゃないわよ」

キディング 「よかったわね、“人気者の先生”は守ってもらえて」

アガサ 「その辺にしとけ」

クエル 「読む前にもう廃刊してる」

アガサ 「おい、あんたまでいじめるなよ。それに俺のクソは自分で出したクソだ。」

才能を誤魔化すような卑怯者とは違う」

キディング「あたしがいつ誤魔化したってわけ」

アガサ「人の“箱”に手を出す盗人だろ」

キディング「大した例えね、次回作で使ったらどう？」

ドル「いちいち絡むのはよせば？キーカー耳につくし先生だって集中できないわ」

キディング「あんたこそいちいち口を挟まないでよ。男の横でしか喚けない尻軽の癖に偉そうに言わないで」

キディング「男が求めるの。あんたみたいになちんちくりんにはわからないでしょうね。保護者同伴の半端なお嬢ちゃんには」

キディング「もう口を開けないで。その雨に濡れた犬みたいな香水にはいい加減反吐が出る」

ドル「フェロモンの匂いよ、(クエルに)ね」

クエル「俺が悪かったから、落ち着いてくれ」

キディング「(クエルを見て) 良くもバラしたわね」

キャプテン「キディング、もとはといえば君が余計な事を頼むからいけないんだ。仕事に

集中してくれ、今はー」

キディング「いいよ、今度はあたしの秘密を話してあげる。大した話じゃないけどね」

オールド「人の箱”はもうよせよ」

キディング「(ルーキーに) 右端の前から三番目、そこがあなたの席だった」

ルーキー「(なんの話やら)・・・」

キディング「忘れたの？それとも私が覚えすぎ？」

ドル「一体何の話をー」

キディング「同じ高校だったのよ。あなたと、あたし」

アガサ「そうなのか」

ルーキー「こんな奴知らないぞ」

キディング「同じクラスじゃなかったから」

ルーキー「人違いだ」

キディング「いえ、私は覚えてる。マニアがなぜか持つてる卒業アルバムで確認しようか？」

ルーキー「同じだからなんだ」

オールド「(変わって) 関りはないんだろ」

キディング「ええ、あるのは彼の父親だけ」

キャプテン「父親？」

キディング「あたし一度こっぴどく叱られたの」

ドル「違うクラスの男子の父親に？」

キディング「警官だもの。悪さをすれば駆けつけてくるのは当然でしょ」

ルーキー「・・・」

キディング「他の生徒があたしのジョークを馬鹿にしてるって聞いたの。だから、我慢なら

なくて帰り際、そいつの口に石を詰めてやった。そしたら彼のパパから散々説教をくらった。だけど、こうも言ってくれた。『暴力はよくないが、相手生徒は他人の事を悪く言ったから罰が当たったんだ。正直者は銃に救われ、悪党は銃に殺される。自分の行いは必ず自分に返ってくる。そう息子にも教えてる』ってね」

ルーキー 「・・・」

クエル 「卒業してからはなにを」

アガサ 「ああ、先生、俺も同じ事を聞こうとしてた」

キディング 「さあ、後は知らない」

アガサ 「いいさ、後はこいつに直接聞く」

アガサ、拳銃を抜きルーキーに向ける

クエル 「まだ決まったわけじゃない」

キャプテン 「何の話だ」

アガサ 「弱腰になるなよ先生」

オールド 「作戦通りか」

キャプテン 「イレギュラーだ」

アガサ 「先生、見せてやれ」

クエル 「・・・」

アガサ 「早くしろ！」

クエル、目玉をテーブルの上に置く

アガサ 「ずっと俺達を這ってた警官の目玉だ」

オールド 「なに」

アガサ 「誰かの告げ口がなきゃこうはならねえ」

キャプテン 「どうして黙ってた」

アガサ 「誰が警官の仲間かわからないのに教えられるわけがないだろ。でも、これではっきりしたぜ」

ルーキー 「(動揺し) オヤジが警官なだけで俺を疑うのか」

アガサ 「だったら、答えろよ。チームに入る前はどこにいた」

ルーキー 「お前に言う筋合いはない」

アガサ 「だったら、先生に言えよ。取材中だ」

キディング 「そういえば自分から入ってきた来たのは彼だけよね、キャプテン」

キャプテン 「・・・そうだ」

キディング、銃をルーキーに向ける。
マニア、それに合わせて銃を向ける

ルーキー 「よせよ」

キャプテン 「キディング」

オールド 「決断は早い方がいい」

キャプテン 「仕切るのは私だ」

オールド 「(変わって) 俺から言わせてもらえば、犬の子は犬だ」

オールド、銃をルーキーに向ける

キャプテン 「事実かどうかはつきりしない以上、話し合うべきだ」

アガサ 「正気か、ちんたらしてたら別の仲間がやってくるぞ」

キャプテン 「採めるな、が我々の信条だ」

ドル、銃をキャプテンに向ける

ドル 「裏切るな、もでしょ」

キャプテン 「ややこしくするな」

ドル 「どうして彼を庇うの？怪しいわ」

ルーキー 「さすが作家の嫁はするどい」

アガサ 「黙ってろ」

ドル 「仲間がやってくるまで時間を稼ぐ気？」

キャプテン 「私の仲間は君達だ。よく考えろ、殺しを教える警官がどこにいる」

ドル 「・・・」

キャプテン 「ここで仲間われをしていもしようがない。今は冷静に対処するべきだ」

オールド 「話し合うと言ったが一体何を」

キャプテン 「(アガサに) その警官は今どこにいる」

アガサ 「・・・裏に転がってる」

クエル 「生きてるのか」

アガサ 「言ってなかったか」

キャプテン 「X、第二章、215ページ、18行目『へたに殺せば地獄に秘密を隠される』

シンプルだが今の状況に対してのヒントじゃないか」

一同、沈黙。

すると、オールドが銃を降ろす。と、周りもゆっくり降ろしていく

キャプテン「ドクター、目玉はまだ返せないが転がる患者の手当てをしてやってくれ」

マニアがアガサに目をやる

アガサ「大したもんだぜ、先生。あんたの書いた言葉が一人の男を救っちゃった。俺の

本にはそんな力はなかったよ」

アガサ、拳銃を降ろす

アガサ

「確かにこの手にはペンを持つ資格はなかった。だがその代わりに（銃を上げ）こいつを掴んだんだ。これは“運命”だ。それを誰だろうが邪魔されてたまるか」

アガサがゆっくりルーキーに近づく

アガサ

「お前は匂うぜ？俺はいつだってお前を疑ってやる。いつまでもだ」

アガサ、こっちだとマニアを連れていく

キャプテン「全く素晴らしい。私もまだ甘いな。私に匹敵するXの読者を失うのが心苦

しくてつい、助けてしまった」

ルーキー「・・・」

キャプテン「だが、正しいタイミングで口を開かなければ次は本当に死ぬ事になる」

と、クエルの電話が鳴る。

キャプテン、仕方がないと一同に去るよう促す。

キャプテン「席を増やさなければ行けないな」

キャプテンがルーキーを連れていく

クエル、電話をとる

クエル

「・・・生まれる！？・・・無理だ。言っただろ、明日までかかる・・・お前がそばにいてやれるなら、彼女も安心だろ。ああ、そうだ、旦那は俺だ。でもな・・・」

わかったよ・・・ああ、仕事は順調だ。そう思いたい」

暗転

Q3 『Dogs?』 — 犬は誰だ (The Comedy) 『

S11 彼らが用意した場所(夕)

手足を拘束されて椅子に座らされている男がいる。「マークス。殺し屋達が彼を警戒するようにそれぞれ囲っている。

キャプテン、起こすようにルーキーに指図する。

ルーキー、項垂れたマークスの顔を叩いて起こす。

マークス、顔を上げる。口はテープで塞がれ、左目にはガーゼが張られている。

キャプテン、彼のテープを剥がす

キャプテン 「状況は理解してるか」

マークス 「・・・」

キャプテン 「警官の君と我々は混じってはいけなかったんだ。生きてる世界が違う」

マークス 「・・・」

キャプテン 「今、もんー」

マークス 「確かに生きている世界は違うな」

キャプテン 「・・・今問題が起きー」

マークス 「お前らの顔を見てすぐにマトモな連中じゃないとピンときた。どうしてかわかるか、簡単だよ。全員顔にイカれた場所で、イカれた連中と、イカれた行動をとっていますと書いてある」

キャプテン、喋ろうとする。

が、マークスがさっさと解けと、喋り続ける。

キャプテン、ムキになってマークスの言葉にか被せて喋る。途中、我慢できずにマークスの元に戻り、彼の口にテープを張り直す
マークス、譲ってやると手をやる

キャプテン 「満足し」今、問題が起きてる。何者かが君をこっちの世界に引きずり込んだ。

これは極めて深刻な事態だ。それを明らかにしなきゃならない。協力してくれないか。“アリス”君」

マークス 「・・・」

キャプテン 「手を貸せば、もう一つの目玉は飛び出さずに済むぞ」

マークス 「・・・」

キャプテン 「参ったな。先生、申し訳ないが取材は一時中断だ。次のQは私が出す」

キャプテンがマーカスの口のテープを剥がす

キャプテン 「答える、(マーカスに) お仲間の犬は誰だ」

オールド、思わず吹き出す

キャプテン 「笑わせたつもりはない」

オールド 「そんな言い方あるかよ。(変わって) 皆、聞いたか今のは悪い例だ」

キャプテン 「教育係は御免では？」

オールド 「目玉をとられても耐えた男だぞ、100発撃たれても持ち堪えるさ」

キャプテン 「だったら、吐くまで撃ち続ける。200発でも300発でもな」

オールド 「なにをムキになってる物の例えだろ。お前が決めたんだ。まずはこの男の言い分を聞こう」

マーカス、口を開こうとする。

ドル、急いでキャプテンの手からテープを奪いマーカスの口に張り直す

ドル 「反対」

アガサ 「なんだ」

ドル 「私は会計士よ、札束を触れば大体はいくらかって予想はつく。それと同じで男を一目見れば「マトモ」か、そうじゃないかがわかるの。見てこの顔、絶対、やかましくなる」

アガサ 「喋るならそれに越したことはないだろ」

ドル 「この状況よ？ 助かる為なら都合がいい嘘だつてつくわ」

オールド 「聞いてみなきゃ嘘だとわからない」

ドル 「私を信じて。ロクな事にならない」

キディング 「急に慌てて何よ」

ドル 「そんなじゃない、あなたからも何か言ってよ、先生」

クエル 「確かにこれ以上騒がれると締め切りに間に合わない」

ドル 「ありがとう、クエル」

アガサ 「クエル？」

キャプテン 「まあ、落ち着け。問題があればその都度彼の口を塞げばいい。わかったな」
ドル 「・・・」

キャプテン、手を伸ばしマーカスのガムテープを剥がす

マークス 「……」
キャプテン 「君の予想は外れたな。彼は聞き分けの言い男の様だ、ドル」
マークス 「ドル？彼女はバレンティアだ。相変わらず綺麗だよ、前よりも大人になったか」
一同 「……」
マークス 「それもそうか、女つてのは目を離すとすぐに蕾の色が変わっちゃう」

ドル、急いでキャプテンの手からテープを奪いマークスの口に張り直す

クエル 「……アガサ、そういえば彼女の前の男は警官だと言ってたな。彼か？」
ドル 「いいえ！」

マークス、俺だと拘束されたまま元氣よく手を上げる。
ドル、その手を下げる

クエル 「そうだと言ってるぞ」
ルーキー 「作戦通りか」
アガサ 「イレギュラーだ！」
ルーキー 「アガサ、あんたの嫁は警官と付き合ってたのか」
ドル 「昔話よ」

ルーキー、拳銃をドルに向ける

ドル 「ちょっと」
ルーキー 「(アガサに)俺の親父が警官ってだけで銃を向けたんだ。疑うには充分だろ？」
ドル 「(アガサに)あんたなんか言っつてよ」
アガサ 「……」

マークス、テープ越しに必死に声を出してる

オールド 「(変わって)何か反論があるみたいだ、誤解を解いて貰えよ」

ドル、テープを剥がす

マークス 「俺は今も付き合ってるつもりだ！」

ドル、再びルーカスの口にテープを戻そうとする。
が、キャプテン、彼女の手を掴んで止める

ドル 「お願いだからややこしくしないで！（アガサを指し）私は彼と結婚してるの。
今はこの人だけ。そうでしょ」

アガサ 「どうだか、（クエルを指して）この男の事も名前でも呼んでたぞ」

ドル 「ちょっと」

クエル 「痴話げんかに巻き込まなよ」

ドル 「助けてよ」

ルーキー 「今だろうが前だろうが関係ない。警官とつるんでいた以上は仲間の可能性は十分あり得るだろ」

キャプテン 「彼女は君の仲間か」

マーカス 「それ以上の関係だぜ？殺し屋の隊長さん」

ドル 「黙らせようとする。がー」

キャプテン 「指を立てて止める）やはり君は我々の事を知っているわけだな、ミスター
アリス」

マーカス 「マーカスだ」

キャプテン 「マーカス。やはり質問を戻そう。この中に君と手を組んだ者がいるな？」

マーカス 「・・・」

キャプテン 「その人間の目的は？」

マーカス 「映画のディパーテッドを観てないのか」

キャプテン 「・・・つまり潜入捜査か。ドル、彼はお喋りで助かるよ。しかし、重要なのは
ここからだ」

マーカス 「・・・」

キャプテン 「君の仲間は誰だ」

マーカス 「・・・」

キャプテン 「困ったな。また口を閉じてしまった」

キャプテン、Xを上げる。

キャプテン 「では、この本に習うとしよう」

マーカス 「・・・」

キャプテン 「Xだ、読んでいないのか。（ページを開きながら喜べ、君も物語の一部になれる。（あるページで止まり）X、第三章、265ページの10行目。『疑いが

ある者に真実を吐かせるなら踏み絵が一番だ』」

キャプテン、いきなりナイフをマークスの太ももに刺す。
マークス、あまりの痛みに声をあげる

キャプテン「次は誰の番だ、彼の仲間であれば手は止まるだろうがチームの一員であれば容易いだろう」

マークス 「(クエルに) 随分と余計な事を書いてくれたもんだ」

キャプテン「だったら、さっさと吐けばいい」

マークス 「・・・」

キャプテン、ナイフの持ち手を一同に向ける
ドル、それを受け取る

マークス 「驚いたよ、殺し屋だなんて。会計士はどうした」

ドル 「今もそうよ」

マークス 「バレンティア、俺はまだお前を愛してる」

ドル 「いくら渡したと思ってるの。それをとんずらこきやがって」

ドル、ナイフをマークスの太ももに刺す。
それからアガサにナイフを向ける

ドル 「気が済んだ？」

アガサ 「いや、まだだ」

アガサ、ナイフを受け取り構える。
と、マークスの太ももではなくタマ目掛けて突き刺す。
マークス、太ももとは比べ物にならない痛みが襲い椅子から崩れ落ちる

マークス 「太ももじゃないのお！」

アガサ、無理矢理にマークスを起き上がらせて椅子に戻す

アガサ 「ショーはまだ終わりじゃない」

クエル 「やりすぎだ」

オールド、ナイフをアガサから受け取る。
躊躇なくマークスの太ももに突き刺す。

マークス、声を上げる。

オールド、人が変わりもう一度マークスの太ももに突き刺す

マークス 「（声を上げて）一人一回じゃないのお！」

オールド、キディングにナイフを渡す

マークス 「冗談だろ、こんなちんちくりんが殺し屋か？ナイフじゃなくキャンデイの方が似合ってるぜ」

マニア 「馬鹿にしないで」

マークス 「こりゃあいい、ママが守ってくれてよかつー」

と、キディングがマークスのふとももにナイフを突き刺す。

マークス、咄嗟の痛みに声を上げる

マークス 「まだ喋ってたろ！」

キディング 「笑いはテンポが命、死も同じなの。手早く殺す」

キディングがマニアにナイフを向ける

マニア 「私がある」

マニア、メスを出す

マークス 「今に見とけよ、目玉が飛び出るまで殴ってやる」

マニア 「彼女を悪く言うのは許さない」

マークス 「知るかよ、ここにいるのは全員ゴミだ」

マニア 「彼女はゴミなんかじゃない」

マークス 「なら、生ごみに格上げしてやる。だから、それを床に捨ててくれ。あんたは医者だろ、さっきだって目の上に毛布を掛けてくれたじゃないか」

マニア 「今の私は医者じゃない」

マニア、メスでマークスの太ももを突き刺す。

マークス、声を上げる。

マニア、メスについた血をマークスのガーゼで拭う。

それからアガサの酒瓶を奪いメスにかけてから瓶を彼に返す。

そして、ケースをメスにつけて、しまう

アガサ 「最後はお前だ」

一同、ルーキーに目をやる。

ルーキーはマーカスの前に立つ

キディング 「忘れ物」

キディング、ルーキーにナイフを向ける

ルーキー 「ああ」

と、ルーキー、ナイフを受け取った途端にキディングの後ろに回り、彼女の首にナイフを押し付ける。

その瞬間、殺し屋達がルーキーに拳銃を向ける

マーカス 「(咳き込みながら) 悪い。しくじった」

アガサ 「結局お前か」

ルーキー 「捨りがないって？悪かったな」

キディング 「助けて早く」

アガサ 「だから言ったんだ、初めからこいつを殺っとけばいいって」

ドル 「私を一度疑ったじゃない」

キディング 「今、争わないで」

オールド 「こうなれば話は早い」

キディング 「ちよっと待って」

マニア 「駄目よ、今撃てば彼女に当たる」

キディング 「当たるよ」

アガサ 「知った事かよ」

オールド 「ルーキー、我々に潜り込んだ理由は」

ドル 「逮捕しかないでしょ」

マーカス 「怒るなよバレンティア。話がある」

クエル 「目が抜けてよく元気だな」

マニア 「今だけよ」

オールド 「捕まえるだけなら何故ここまで引っ張った」

マーカス 「カードが揃うまで待ってたんだ」

オールド 「(変わって) 何の事だ」

アガサ 「なんだっていい。さっさと、やっちゃまおう。他の警官が来るのも時間の問題だ」

マークス 「安心しろ。俺達だけだ」

アガサ 「大した度胸だ、お前ら二人で俺らとやりあえるとも」

マークス 「やりあう気なんてないさ」

オールド 「大人しく捕まるとでも」

マークス 「そうじゃない、俺らはお前らと手を組みたいのさ。殺す人間は別にいる」

ルーキー 「マークス、今は喋るな」

マークス 「(咳き込みながら) 喋るしか痛みを誤魔化せない」

ドル 「仲間になるのに随分手をこむのね」

アガサ 「近づく為の口実だ」

オールド 「誰を殺すって？」

ルーキー 「組んでくれるか？」

オールド 「いつ殺す」

ルーキー 「このゲームが終わる頃には」

アガサ 「真に受ける気か」

キャプテン 「私が仕切りたい」

ドル 「殺した後は私らを捕まえるわけ」

ルーキー 「そちらの出次第だ」

キャプテン 「聞こえてないのか」

アガサ 「捕まりたくなければ手を組むか考えろって？馬鹿か、俺は二度と銃を降ろ

さねえぞ」

オールド 「(変わって) 賛成だ、標的の名前も言えない奴の事なんて信じられるか」

キディング 「あたしは助けしてくれるなら手を貸すわ」

キャプテン 「君は少し黙ってる」

キディング 「ルーキー、この手を借りるつもりなら、その手を離して」

ルーキー、少しの間を空けてナイフをゆっくり離す

マニア 「正気？(マークスを指して) こいつはあなたを侮辱した」

キディング 「あたしが死んだら傑作のジョークが聞けなくなる」

マニア 「(クエルを指して) 彼のでしょ」

オールド 「(変わって) 今回ばかりは話し合いでどうにかなりそうにもないな、キャプテン」

マークス 「バレンティア、前の事は謝る。だから、戻ってこい。お前だけでもムシヨに入れるのは防いでやる」

ドル 「信じるとても？」
アガサ 「ざまあみろ、お前はもう願い下げたとよ」
ルーキー 「バレンティア、俺のならどうだ」
ドル 「・・・」
アガサ 「ちょっと待て、どういう意味だ」
ルーキー 「助かったよ、あんたの詳しい事は彼女から聞かせてもらってたよ、全て“上から”な」

ドル、銃を殺し屋達に向ける

アガサ・マーカス 「は！聞いてない！」
ルーキー 「(マーカスに) こっちが言いたい。金に困って女にコン泥させたのか」
マーカス 「人間が悪いぞ」
アガサ 「今なら許してやる、馬鹿はやめろ」
ルーキー 「旦那のいう事は聞けないってさ」
オールド 「(変わって) バレンティア、銃を降ろせ」
ドル 「・・・」
オールド 「俺のいう事も“いつもみたく”聞けるだろう」

ドル、躊躇しながらもルーキーとマーカスに銃を向ける

アガサ・マーカス・ルーキー 「は！」
アガサ 「まさかお前もか」
オールド 「(変わって) 私もだ」
アガサ 「ジジイてめえ！」
キャプテン 「・・・誘われていないぞ」
マニア 「修羅場ね」
キディング 「修羅場だ」
アガサ 「嘘だと言え、一発で許してやる」
ドル 「作家のくせして随分と鈍くて助かったわ」
アガサ 「ルーキーが警官だと知ってたのか」
ドル 「さあね。私、体にしか興味がないの。警官なだけあってすごかったわ、どこかのフニヤチン作家とは大違い」
キャプテン 「何故私だけ誘われていないんだ」

アガサ、拳銃をドルに向ける。

ドル、それに対し即座に彼に銃を向ける

マークス 「クソ、よくも俺の女を」

ルーキー 「俺の女だ」

オールド 「(変わって)俺のだ、(変わって)私のだ」

アガサ 「元は俺のだ」

キャプテン 「クソ、会話に入れない」

ドル 「取り合わないでよ」

ルーキー 「マークス、むきになるなよ、タマはないんだ、今更使いものにならない」

マークス 「言うなよ」

アガサ 「安心しな、こいつのタマも撃ち落としてやる」

ルーキー、降伏の手を上げながら

ルーキー 「キャプテン、プロであるあんたらにしか頼めない」

キャプテン 「殺す人間の件か」

ルーキー 「ああ。刑務所はごめんだろ？報酬は自由だ、悪いが選択肢はない」

マークス 「先生どうした、手が止まってる」

クエル 「・・・俺はどうなる、本を書ききればここを出れるんだよな」

ルーキー 「本を書ききり、狙いの男が死ねばな」

クエル 「・・・ちよつと待ってくれ話が違う」

キャプテン 「大丈夫だ、約束は守る。いつだって優先すべきは先生、あなたの作品だ。それでも今はルーキーの話も聞かないとならない」

アガサ 「警官の言う事を聞くのか」

キャプテン 「あくまで我々は殺し屋だ。仕事を頼まれた承するならば、彼は依頼人となる」

クエル、頭を抱え椅子に座る。

マークス、咳き込む

ルーキー 「ドクター、彼は全身穴だらけだ。助けてやってくれ」

ルーキー、そう言いながらナイフでマークスのロープを切ろうとする。
と、マニアがいきなりルーキーの肩を撃つ。

ルーキー、倒れこむ寸前でマニアの胸を撃つ

キディング 「(マニアに近寄る) マニア」

キャプテン 「なんの真似だ」

マニア 「・・・これでいいんでしょう」

アガサ 「あ？」

と、マニアがキディングの首を引き寄せてキスをする。

キディング、咄嗟に離れ口に手を当てる

マニア 「キディング、みんな騙される。安心して。あなたは助ける」

アガサ 「さっきからこの医者は何にをほざいてる」

マニア 「とにかく、早く手を引くこと。少しでもジョークを言っていたいでしょ」

マークス、咳が止まらなくなる。次第に体も震えだす

マニア 「ああ、もう駄目ね」

ルーキー 「何をした」

と、マニアも咳が出始める。彼女はしまったと胸のポケットに手を当てる

マニア 「(近くのキディングに) 離れて」

キディング、その声に体を起き上がらせる。

マニア、胸ポケットに手を突っ込み、中の物を取り出す。

手には銃弾で割れた試験管が。そこには彼女の真っ赤な血と、ドロツとしたウイルスがこびりついている。

一同、二人から一斉に離れる。

が、既に遅いと容易に想像がつく深い咳が響いていく。

クエル、起きている状況に思わずPCを閉じて絶望に蓋をする

暗転

Q4 『Who —お前は誰だ(Pandemic)』

S12 警察署・署内(回想)

ルーキーが自分のデスクに座っている。
と、マークスが資料を持ってくる

マークス 「(その恰好を見て) 似合ってるぞ、殺し屋に見える」

マークス、封筒の資料を出してルーキーに向ける

マークス 「キャプテンと名乗る男が集めている人間がわかった」

ルーキー、資料を受け取りパラパラとめくる。

マークス 「うまく操れるといいな」

ルーキー、資料の一枚に目が留まる。
それをマークスに向ける

ルーキー 「見ろよ、マークス。お前の好みだろ」

X X X X

S13 同一別場所①(回想)

別場所にドルがやってくる

マークス 「どうかかな」

ルーキー 「元会計士って、前のもそんなんじゃないかったか」

マークス 「俺の事はいい」

ルーキー、資料を捲る。

と、ドルの元へアガサがやってくる

マークス 「そいつも作家だったらしいぜ」

ドル 「本まで出してたのにもったいない」

アガサ 「一度読んだろ、俺には才能がない」

ドル 「書くより、殺しが好き？」

アガサ 「少なくとも気分はいい」
 ドル 「性に合ってるのね」
 ルーキー 「作家名はー」
 ドル 「ところでどうしてNo.2なの」
 アガサ 「大した理由じゃない」
 ドル 「教えてよ」
 アガサ 「クエル・J・バートンのデビュー作の主人公の名前だ」

S14 同・別場所②(回想)
 キディングが立っている

ルーキー 「こいつは」
 マーカス 「どうした」
 ルーキー 「ハイスクールの同級生だ」
 マーカス 「本当か」
 ルーキー 「問題を起こして親父が一度」
 マーカス 「厄介だな、お前の顔もきつと見てる」
 ルーキー 「廊下ですれ違った程度だし、別のクラスでまともな会話なんてなかったんだ。覚えてるわけがない」
 マーカス 「今はコメディアンだそうだ」
 ルーキー 「あのいじめられっこが」

と、キディングの前にマニアが現れる

マーカス 「ファンもいるそうだ。医者だな」
 ルーキー 「どうして医者が」
 マーカス 「さあな、どこの世界にも物好きはいるもんだ」

ルーキー、資料を見て目がとまりマーカスに顔を向ける

マーカス 「クエル・J・バートンを一度担当していた。足に後遺症が残ったらしい」
 ルーキー 「覚えとくよ」

S15 同・別場所③(回想)
 キャプテンが立っている

× × × ×

マークス 「さすがにプロだ。調べる度に名前も国籍もバラバラでろくにわからなかったよ。収獲は1つだけだ」

と、オールドがキャプテンの前に現れる

マークス 「二人は親子だ。常連のダイナーで口をつけたカップからDNAを抜き取った」

ルーキー 「素人だけと聞いていたがもう一人手練れがいるのか」

マークス 「骨が折れるな」

オールド 「何人集めた」

キャプテン 「七人」

オールド 「その中にどうして私と、(胸に手を当てて) 彼を」

キャプテン 「若いうちに活発に働いていた人間ほど足を止まればよくボケる」

オールド 「ボケ防止の為に人殺しをさせるのか、大した親孝行だ。(変わって) 俺からしたら有難い誘いだ」

キャプテン 「だが、口出しは無用。あくまで私がキャプテンだ」

オールド 「(変わって) 言われなくてもそうするよ、授業参観みたく隅にしよう」

キャプテン 「授業参観？ろくに学校など行かせてもらった試しなんてない」

オールド 「これからじっくりするよ」

マークス 「好きにやれるチームをつくっておいてわざわざ父親なんか入れるか？」

ルーキー 「一人前に認めてもらおう為さ」

マークス 「俺にはわからんね」

ルーキー 「・・・」

マークス 「お前は銃の腕がいい。変に見せびらかすなよ」

ルーキー 「うまく馴染んでみるよ。父さんの口癖だ。悪党も悪党には善人だってな」

マークス 「名言だな」

ルーキー 「親父の為にも、うまくやるさ」

キャプテン 「さあ、授業開始だ」

マークス、去っていく

× × × ×

S16 キャプテンが用意した場所(回想)

殺し屋達が銃を握っている。

彼らの目の前にはそれぞれのが用意されている。

キャプテン、銃口を的に向けてと一瞬的に穴が開く。

一同、見様見真似で自分の的を撃っていく。

オールドは見事に弾を的中させていく。

アガサ、ドル、キディング、は当てられずにいる。マニアに至っては撃ち
もしない。

と、ルーキーがドルの腕の位置を正す。

ドル、再び撃つと当たる

ドル 「得意なの？」

ルーキー 「馴れてるだけさ」

ドル 「悪い男なのね」

ルーキー 「君もだろ」

アガサ、撃つと命中する

キャプテン 「その調子だ」

キディング、数発撃つが当たらない

アガサ 「銃が大きすぎるんじゃないか、子供用と代えてもらえよ」

と、マニアがアガサに銃を向ける

アガサ 「なんだよ、医者か人を殺すって？」

マニア、撃つ。

が、弾は入っていない。

アガサ、強がっているが焦りが安堵の溜息に変わる

キャプテン 「マニア、どうして弾を入れない」

マニア 「私の分はキディングにあげて」

キャプテン 「彼女の付き添いで呼んだわけじゃない」

マニア 「彼の言う通り私は人の救い方しか知らないの」

キディング 「(アガサに) よかったね、さっそく救われた」

アガサ、挑発に乗り、攻め寄るが間にキャプテンが入り

キャプテン 「X、第四章、捕らえられていた主人公が何故、殺し屋達の手から逃れられたと
思う」

アガサ 「運が良かったのさ」
キャプテン 「違う。想像上のフィクションだからだ」
キディング 「それを言ったらもともちうもない」
キャプテン 「殺し屋がしくじるなどはない」
アガサ 「あんたにとっての聖書だろ。それを悪く言うのか」
キャプテン 「いや、エンディングには満足いつてるよ。主人公の男は結局逃げたが別の殺し屋に殺される。これがなにをあらわしてるかわかるか？君たちの代わりはいくらでもいるという事だ。死にたくなければ殺せ」

× × × ×

S17 人気がない路地 (回想)

遠くで車の走行音。

ルーキーの元にマークス

マークス 「狂ったファンてのはいくらでもいるんだな」
ルーキー 「その本が彼らを動かす」
マークス 「そんないいもんかね」
ルーキー 「いや、クソだ」
マークス 「奴らの前で絶対言うなよ」
ルーキー 「だから、今言ってる」
マークス 「そこまでその本を妄信していればお前の話にはのるだろうな」
ルーキー 「そう願う」
マークス 「あとは俺がうまくやるかだな」
ルーキー 「マークス、悪いと思ってるよ、危険な目にあうかもしれない」
マークス 「気にするなよ、お前の親父さんには俺も世話になった。」
ルーキー 「・・・」
マークス 「一つ質問いいか」
ルーキー 「(なんだと、顔を向ける)」
マークス 「(何か口に出そうとスするが言い換えて) “クエル”を殺した後はどうする」
ルーキー 「・・・」
マークス 「X、第四章、321ページ、5行目。『計画に終わりはない。済ました殺しは永遠に秘密であり続けるのが肝心なのだ』」
マークス 「暗記したのか」
ルーキー 「俺は奴らの前じゃ一番の読者だ」
マークス 「確かに、イカれたファンがいかにも考えそうな計画だ」
ルーキー 「とにかく今は連中をうまく出し抜くよ」
マークス 「言えた太刀じゃないが無理はするなよ」

ルーキー 「お互い様だろ、同じ危ない目に合うんだ」

マークス 「俺はいい。実は手も打ってある」

ルーキー 「マークス。正直者は銃に救われ悪党は銃に殺される。父さんの口癖だ。きつとうまくいく」

マークス 「・・・忠告はしたぞ」

マークス、去る

× × × ×

S18 彼らが用意した場所(回想)

殺し屋達が集まっている。

テーブルの上にはPC、椅子の下には箱が用意されている

キャプテン 「さあ、準備は整った。あとは大作家をこの場所へ連れてくるだけだ」

オールド 「大したオタクだよ。いくら好きだからと言って、監禁しようとはだれも思わない」

ルーキー 「そんな乱暴なものじゃない。2日だけ仕事場を提供するだけだ」

キディング 「どんな顔なんだろう」

ドル 「顔はどうだっさいい」

キャプテン 「そうだ、あくまで、仕事だ、くれぐれもサインなんて求めて、困らせるなよ」

オールド 「(変わって) しっかり頼むぞ」

キャプテン 「こちらからお願ひするよ。今回の提案はルーキーだがその場を仕切るのはこの私だ。くれぐれも、口出しは無用。いいな？さあ、いつものだ、殺し屋」

ドル 「今日は省かない？」

キャプテン 「どうしてだ」

ルーキー 「もたもたしていると先生を捕らえ損ねる」

キャプテン 「わかった、仕方がない」

アガサ 「だからって、先生の前で絶対に叫ぶなよ」

キャプテン 「・・・パーティイの時間だ」

一同、去っていく。

途中、キャプテンがルーキーに声をかける。

マニア、それを横目で見ることが去っていく。

キャプテンがルーキーに手を差し出す

ルーキー 「・・・」

キャプテン 「握手の練習だ」

ルーキー 「仕事じゃないのか」
キャプテン 「君のおかげでもうじき大作家に会えるぞ」
ルーキー 「(頷き) うまくいきそうだ、あんたを頼ったのが正解だったよ」
キャプテン 「同じファンの頼みだ、当然だ」

ルーキー、手を返し握手する。それを離そうとするが―

キャプテン 「(離さず) 君も私も優先順位は一緒だろう」
ルーキー 「ん」

キャプテン 「なにか起きようが彼の本が一番だ。その為の計画だ」

ルーキー 「そうだな」

キャプテン 「素晴らしい。お互い、それを忘れないでおこう」

キャプテン、手を離し、去っていく。

ルーキー、息を少し吐き、去ろうとする。

と、マニアが戻ってくる

マニア 「あなたのプランの事で聞いておきたくて」

ルーキー 「仕切るのは彼だよ」

マニア 「クエル・J・バートンをここへ担いだ後はどうするの」

ルーキー 「椅子に座らせる」

マニア 「誰が」

ルーキー 「我々、男が」

マニア 「その後は」

ルーキー 「仕事をさせる」

マニア 「トイレはどうするの」

ルーキー 「え」

マニア 「トイレよ」

ルーキー 「さあ。二日のうちは出られないから箱の中にでもするんじゃないか」

マニア 「座って?」

ルーキー 「立とうが座ろうが自由にさせればいい」

マニア 「立つ場合、自分でさせるの?」

ルーキー 「当たり前だろ、君は一体―」

マニア 「無理よ」

ルーキー 「なにが」

マニア 「彼は立てない」

ルーキー 「なんだよそれ」

マニア 「私の患者だったのよ。彼」

ルーキー 「・・・」

マニア 「家で階段から転げ落ちたの。マヌケよ、まるで素人が書いたみたいな事故。擦り傷が治ってもまともに歩ける事は絶対じゃない」

ルーキー 「まいったな」

マニア 「ルーキー、あなたは一体、誰を招き入れるつもりなの？」

ルーキー、大きいため息を吐く

ルーキー 「プランBは用意していなかったんだけどな」

マニア 「・・・」

ルーキー 「これから全て、俺の言う通りに動いてくれ」

マニア 「どうして」

ルーキー 「君にとってのスターは作家ではなく、コメディアンだろ。彼女を守るためだ」

マニア 「・・・」

ルーキー 「時間がないが、優秀な医者であれば一度で覚えられる」

ルーキー、口を開く。

マニア、淡々と彼の言葉を耳に入れていき、ポケットから注射器を取り出し、椅子の下の箱にそれを落とす。

やがて、時間が戻っていくー

× × × × ×

S19 彼らが用意した場所(現在・夜)

以下、シーン11の出来事を抜粋し、継続していく

マニアがいきなりルーキーの肩を撃つ。

ルーキー、倒れこむ寸前でマニアの胸を撃つ

キディング (マニアに近寄る) マニア

キヤプテン 「なんの真似だ」

マニア 「・・・これでもいいんですよ」

アガサ 「あ？」

と、マニアがキディングの首を引き寄せてキスをする。

キディング、咄嗟に離れ口に手を当てる

マニア 「キディング、みんな騙される。安心して。あなたは助ける」
アガサ 「さっきからこの医者にはなにをほざいてる」
マニア 「とにかく、早く手を引くこと。少しでもジョークを言っていたいでしょ」

マークス、咳が止まらなくなる。次第に体も震えだす

マニア 「ああ、もう駄目ね」

と、マニアも咳が出始める。彼女はしまったと胸のポケットに手を当てる

マニア 「(近くのキディングに) 離れて」

キディング、その声に体を起き上がらせる。
マニア、胸ポケットに手を突っ込み、中の物を取り出す。
手には銃弾で割れた試験管が。そこには彼女の真っ赤な血と、ドロツとしたウイルスがこびりついている。

一同、二人から一斉に離れる。

PCを閉じるクエル

アガサ 「おい、医者、それはウイルスだとか言わないよな」

マニア 「(苦しみながらも) こんな咳が出てウイルスじゃないわけないでしょ、馬鹿なの？だから売れないのよ」

ドル 「おうちでおとなしくしてると言ってたじゃない！」

マニア 「(試験管をあげて) おうち」

オールド 「こいつメチャクチャ頭おかしいぞ」

キャプテン 「ドクター、なにをした」

マニア 「ウイルスちゃんが家出した」

キャプテン 「そのウイルスちゃんにはどうやって感染する」

マニア 「どうやっても感染するわ」

マークス 「(顔を上げて) くそ、バチが当たったな」

ルーキー 「しぶといな、今助けてやる」

アガサ 「諦めるそいつはどう転んでも死ぬ」

キャプテン 「仕方がない、一度退散だ」

クエル 「待ってくれ、俺はどうなる」

キャプテン 「言っただろ、タイムーは時間が来なければ切れる事はない」

クエル 「それじゃあ・・・」

キャプテン「(一同に) 緊急事態だ。一旦、引こう」
クエル・マークス「は」

キャプテンらが出口へ去ろうとした時、ルーキーが銃を向ける

ルーキー「ショーはこれからだ」

キャプテン「なんのつもりだ」

ルーキー「悪いな、計画なんだ。なあ、マークス」

マークス「串刺しにウイルスと目玉ポロリは計画じゃない」

マニア「プランBよ」

マークス「知らないぞ」

キャプテン「ルーキー、そこをどくんだ。君だって」

マニア「彼は大丈夫よ。彼女と同じお薬を処方してあるから」

キャプテン「ドクター、君は彼らとグルだったか」

マニア、咳がより深刻になる

マークス「俺はそんな事聞いてない」

ルーキー「あんた抗ウイルス薬は」

マニア「おあいにくさま、あんたと彼女の方でおしまい」

ルーキー「自分の分を俺に使ったのか」

マニア「予備はあった・・・」

マニア、白い箱に指を差す。

クエル、白い箱の中を探ると注射器が

クエル「これは」

マニア「よかったわね、先生。それを飲めばまだ間に合う」

クエル、慌てて腕に注射器を打つ

キディング「マニア、どうして」

マニア「あなたが生きればそれでいい」

ドル「ルーキー、お願いそこをどいて」

マニア「それはできない」

ドル「このままじゃ全員ー」

と、ドルが咳こみ始める。

アガサ、耐えられず銃をルーキーに向ける。

が、ルーキー、それよりも早くアガサを撃つ。

アガサが倒れこむ

キャプテン 「全く裏切られたもんだよ、ルーキー。君を友人とすら思っていたのに」

オールド 「全くマヌケな息子だ、なんて呑気な事を」

キャプテン 「黙っててくれ」

オールド 「一人前には遠かったな」

キャプテン 「口出しは無用、私が迅速に対処する」

ルーキー 「キャプテン、あんたを裏切ってるのは俺じゃない」

と、電話が鳴る

キャプテン 「構わないよ、しつかりと愛を伝えるんだ。こうなった以上、命は保証はできな

いからね。だが、君が書き上げた本は必ず私が守る」

クエル 「・・・」

クエル、電話をとらずに切る

ルーキー 「とらないんですか」

クエル、席に座りPCを開き再び書き始める

アガサ、咳で始める

アガサ 「くそ」

マニア 「つらそうね」

アガサ 「黙ってろ」

ルーキー 「(マニアに、クエルを指して) どうして彼にも打たせてた」

マニア 「ウイルスに頼るよりもあなたの手で仕留めた方がきつといい」

ルーキー 「・・・ああ、そうだな。やっと行ってやれるよ、(クエルに) お前の本はクソ
だっとな」

キャプテン 「ルーキー、何を言うんだ」

ルーキー 「・・・」

キャプテン 「・・・君が殺すというのは」

ルーキー 「ああ、(クエルに銃を向けて) この男だ」

クエル 「どうして俺が殺されなきゃならない、俺はただの作家だ」

キャプテン 「ルーキー、先生をここへ連れてくるのが君の計画だったはずだろ。ファンで
ある君のー」

ルーキー 「よせよ、ファンなんて。いつだって本にナイフを突き立ててやる」

キャプテン 「(心の底から落胆して) ファンじゃないのか？」

オールド 「近づくのに熱心な読者のフリを？」

キャプテン 「一字一句、全て暗記してたじゃないか」

ルーキー 「あんたより、オタクになるのは苦労いったよ」

キディング 「先生、余程恨みを買われたのね」

ルーキー 「先生なんかじゃない」

オールド 「どういう意味だ」

キディング 「Xは彼が書いた本でしょ」

ルーキー 「彼の弟が書いた本だ。弟であるクエルJバートンのな」

キャプテン 「何を言い出すかと思ったら君は。ここにいるのは紛れもなくー」

ルーキー 「クエル・J・バートンはドクターの元患者だった。本物は椅子の上に元氣よく
立ってスピーチなんてできやしない」

一同、クエルに目をやる

X X X X

S20 パーティ会場(回想)

クエルが椅子の上へ飛び乗る

クエル 「この顔を見せるのは初めてなんだ。小説家には見えないって？ 同感だ、僕も
そう思うよ」

キャプテン 「我々に近づくために弟のフリを？」

クエル 「・・・ひやひやしたよ、“熱心な読者”の質問には」

X X X X

S21 同(回想)

以下、シーン1の抜粋である

キャプテン 「君は偉大な物語を僕らに与えてくれたんだ。教えてくれ、どうやったらこんな
本が書けたんだ？」

クエル 「秘密にしとくよ」

X X X X

S22 彼らが要した場所(回想)

以下、シーン3の抜粋である

アガサ 「『愛と銃弾には目がない』何故、あんたにはこんなセリフが書けるんだ？どう
やったって俺には無理だ」
クエル 「どうやって書いたかなんて、わからない」
アガサ 「気づいたら出来上がったって？天才かよ」
ドル 「どうしてスピーチなんかする気になったの？それまで顔も見せない引き籠り
だったのに」
クエル 「一度くらいクエルJバードンのファンの顔を見ておきたかったんだよ」
アガサ 「後悔したろ」
クエル 「全くだ」
× × × ×

S 23 同(回想)

以下、シーン5の抜粋である

キディング 「あたしにさ、とっておきのジョークをちょうだい。ベストセラー作家が考えた
ものならウケるでしょ」
クエル 「もう諦めたんじゃないのか」
キディング 「その冗談笑えない」
クエル 「あいにく冗談は得意じゃない」
キディング 「謙遜しないで。じゃなきゃ、あんなイカれたものなんて書けるわ
けない」
× × × ×

S 24 同(回想)

以下、シーン9の抜粋である

オールド 「子供が生まれるというのに心配だろ」
クエル 「彼女には家族がついてるから心配ない」
× × × ×

S 25 パーティ会場(回想)

ドル 「それじゃあ妻と子供は」
アガサ 「弟のだろ」
クエル 「そして、最後に、ここへ立つ事を許してくれた弟にも帰ったら礼を言わないと
それじゃあ、グラスを。全てのクレイジーに」

× × × ×

S26 彼らが用意した場所(現在)
殺し屋達がグラスの代わりにクエルに拳銃を向ける

キャプテン 「君は誰だ」

クエル 「(わざとらしくルーキーに敬礼する)」

アガサ 「・・・警官か」

オールド 「なら彼らとグルのはずだろ」

クエル 「(首を横にふり) いや、このひよろいのなんて顔も知らない」

キャプテン 「それじゃあー」

クエル 「まんまとやられたよ。(マーカスを指して) その死に損ないはお前らの情報を持って俺に近づいたんだ。ここにいる全員をしょっ引こうってな。だからわざわざ捕まえるのに弟の仮装までしたんだぜ」

ルーキー 「礼を言うよ。餌だとわからずにこのことやってきやがった」

クエル 「おまけにウイルスだって? 安い小説じゃないんだぞ、ふざけやがって。こいつ

らが全員、死ねば俺は逮捕できない」

ルーキー 「気づいたところでもう遅い」

クエル 「俺を殺るって?」

ルーキー 「聞くまでもないだろ・・・お前は父さんの死を利用した」

クエル 「・・・」

ルーキー 「Xの捕らえられた男のモデルは父さんだ」

クエル 「・・・」

ルーキー 「父さんはお前の相棒だった。そうだな」

クエル 「・・・」

ルーキー 「Xはお前と父さんが二人で捜査した事件そっくりだ。最後に仲間が助けに来ないで死ぬとこまですべてな」

クエル 「・・・」

キャプテン 「(まるで憧れの目) そうか、あの仲間は君の事か」

ルーキー 「このクズは悪びれもせずに、弟にネタを売ったんだ」

クエル 「大袈裟だよ。それに偉大なお前の父親だ、ただ死んだとなると虚しいだろ。

だから、何か残したやろうと思ったんだ」

ルーキー 「それで弟からいくらもらったんだ」

クエル 「さあ、印税ほどではないな」

ルーキー 「お前の弟も共犯だ」

キャプテン 「なるほど。君の復讐の為に我々も嵌められたというわけか」

ルーキー 「悪いな」

キャプテン 「素晴らしい。だが、これからは予定通りにはいかない」

ルーキー 「・・・」

キャプテン 「私はこの男を守らなきゃならない」

ルーキー 「何を言ってる」

キャプテン 「彼が死んだら、〇ほ世に出ないじゃないか」

キディング 「そんなこと今更、どうでもいいじゃない。マニアもまだ息をしてる。さっさと外に――」

キャプテン、警告の様に上に向かって銃を撃つ

キャプテン 「そんな事だと？ いいか、私の話をよく聞け！」

キャプテン、躊躇なくマニアを撃ち殺す

キャプテン 「何よりも一番大事なのは本の完成だ」

クエル 「調書だよ」

キャプテン 「それもいい。弟さんに渡せば傑作の材料になる」

マーカス 「(虫の息だが) ファンてのはみんなこうなのか。脳みそがそれでいっばいになっちゃう」

ルーキー 「豚小屋を選べ。死にたくないだろ」

キャプテン 「残念だ。君は優先すべき順位を間違えたようだ」

キャプテン、いきなりマーカスを数発撃つ。

マーカス、撃たれた反動でサークルをはみ出して焦げ死ぬ。

キャプテン、ルーキー撃ち合いとなる。途中、弾切れとなりリロード

キャプテン、ルーキー、再び撃ち合う。

ルーキー、途中でキディングを壁にして、キャプテンの手が一瞬止まる。

ルーキー、そこを狙い一発撃ちキャプテンに命中。トドメを刺そうとする。

が、オールドがルーキーを狙い追い詰める。しかし、咳がそれを止める。

ルーキー、その隙を狙いオールドを撃ち殺す。

と、ドル、咳き込む。

ルーキーがドルに目をやり銃を向ける。

ドル 「お願い、助けて。なんだったらあなたの為にチームの金だつて――」

ルーキーがドルに銃を向ける。

が、アガサが代わりにドルを撃つ。しかし外れる。二発目、ドルが死ぬ。
ルーキー、アガサを撃ち殺す。

再度、ルーキーとキャプテンの撃ち合い。キャプテンの弾がルーキーに命中する。が、痛みをこらえるルーキー。そのまま柱の一本を目掛けて撃つと電流を流す装置に命中し、噴き出す。

キャプテン、思わず怯む。

ルーキー、煙の中から現れる

キャプテン「・・・素晴らしい」

ルーキー、躊躇なく撃ち、キャプテン死ぬ。

そして、キディングに目をやると倒れる

ルーキー「・・・やあ、コメディアン」

キディング「・・・」

ルーキー「そういえば父さんが言ってたよ、君は賢い生徒だったって。いつか勇敢な行いをすると」

キディング「・・・その予想は外れたわね」

ルーキー「どうかな、まだ間に合うさ」

キディングが何かに気づきルーキーに目をやるが、彼は項垂れている。

クエルのキーボードの叩く音が響く

キディング、ゆっくりマニアに近づき別れを惜しむ様に彼女の手を握る

キディング「さよなら、あたしのマニア」

と、キディング、何かの感触に気づく。それを握ると気づかれぬようポケットにしまう

クエル「よう、ちんちくりん。今待ってる、これが終わったら、お前のジョークを考えてやるよ」

キディング「結構よ、とっておきのを思いついちった」

クエル「それは残念だ」

キディング、出口へ向かう

クエル 「キャプテンの言う通り、お前らとこっちの世界は混ざらない方がいい」
キディング 「(足を止めて)・・・そうね、出て行ってもらおうわ」

キディング、去っていく。
クエル、作業を続ける。
途中、キディングが開けた扉からハエが一匹飛んでくるが気にも留めず
ひたすらに書き続ける。そして、書き終え電話をかける

クエル 「俺だ・・・全て方付いたよ。お前が言った通り言葉を並べたら奴らその気になりやがって。よくもまあ、次から次へと秘密を吐きやがった。ああ、今送る
(キーボードを一度叩く) 苦労したんだ。傑作を頼むよ。“クエル”」

クエル、やりきった溜息を吐きながらその手を降ろす。
と、電流の電源が落ちる。
ハエが何にも邪魔されることなくクエルに近づく。
クエル、ハエを掴み握り殺し、それを指で弾いてルーキーへ飛ばす。
そして、サークルから足を出すと、転がってるいくつかの銃を品定めする
かのように選び、そのうちマニアの銃を一つ拾い上げる。
が、ルーキーがクエルを撃つ

ルーキー 「勝った気なのか」
クエル 「大人しくハエと添い寝してたらどうだ」
ルーキー 「今のは俺の分だ、次は父さんの分だ」

ルーキー、クエルの足を撃つ

ルーキー 「これが済んだらメールを送ったお前の弟も地獄へ送ってやる」
ルーキー、もう一度銃を構える

クエル 「次は(マークスを指さして) その男の分なんて言わないよな」
と、パトカーのサイレンが遠くで響く。
ルーキー、聞こえるはずのないサイレンに動揺する

クエル 「勝った気にいる、か。そりゃあお前の事だぜ、ルーキー」

ルーキー 「・・・」

クエル 「初めから筋書きは決まってたんだ。俺がここへ連れてこられる事も、お前が

ルーキー そう仕向けることも、それから二日後にこの牢の鍵は開くってこともな」

クエル 「・・・それは、俺達しか知らないはずだ」

ルーキー 「めでたい野郎だぜ。てめえは物事は全て一筋だと思ってやがる。警官のくせしてやけに人を信じる父親とそっくりだ。人は皆、罪と向かい合えるとぬかしやがったんだとよ。そうだよな？ マーカス」

ルーキー 「・・・」

クエル 「(ため息と共に舌打ち) くたばりやがって、確かにバチが当たったな。大人

ルーキー しくこいつの父親の説教を聞いてれば豚小屋に入っても死ぬことはなかった」

ルーキー 「・・・」

クエル 「マーカスだよ、お前の親父を見殺しにしようと決めたのは」

ルーキー 「何を言ってる」

クエル 「お前の親父はマーカスが女に金を掴ませてたのに気づいて自首する様に忠告したんだ。その後さ、マーカスが俺の元へやってきたのは」

× × × × ×

S 27 人気がない路地

クエル、マーカス

クエル 「俺が自分の相棒を殺すって？」

マーカス 「違う、事故だ。今あんたらが追ってる事件があるだろ。それを利用するんだ、

クエル あくまで事件の中で起きた悲劇さ」

クエル 「それにどうして俺が手を貸す」

マーカス 「あんたの弟は作家なんだって？ ネタにすれば大きな金になる」

クエル 「・・・あいつの息子も警官だろ、バレでもしたら今度はこっちが殺されるぞ」

マーカス 「心配するなよ、万が一あんたを狙った時にはしっかり恩は返すよ」

クエル 「・・・それならその時は騙し尽くしてやろう」

× × × × ×

S 28 彼らが用意した場所(現在)

ルーキー 「・・・」

クエル 「まだわからないのか、ジュニア。お前は売られたんだ。マーカスはお前の

ルーキー 計画を俺に流す代わりに俺はお前の父親を片付ける手助けをする」

クエル 「そんなー」

クエル 「言ってたろ、ポーカーと一緒にだってな。準備をしていたのは一人じゃない」

ルーキー、あまりのことにマーカスに目をやる

クエル

「死人に口なしだ、攻めてやるなよ。それでもつてなら止めないぜ、今更、穴が一つ増えたって変わりはない。お前はそいつを撃て、俺はお前を撃つ」

クエル、ルーキーを撃つ。

が、弾切れだ。

と、その時である、オールドがまるで痛みを忘れたかのようにむくつと起き上がる

オールド

「おう、作家。いや、今は違うな、まあなんだっていい“俺を”殺し損ねたな」

オールド、躊躇なくクエルを撃つ。そして、トドメにクエルの首を腕でへし折る。

ルーキー、ただオールドを見つめる。

オールド、そしてまた、銃口を向けた

暗転

05 『Ending』—結末は?』

S29 墓地

数日後。

一つの墓地の前に杖を突きながら男が近づく。「作家」である。

彼は手に持った花を供える。

と、うしろから男がもう一人やってくる。オールド。彼も手に花を持つ

オールド 「彼とは」

作家 「僕の兄です」

オールド 「じゃあ、あんたがクエルか」

作家 「あなたは」

オールド 「一度、彼の捜査に協力したことがあったんだ」

作家 「では、兄が世話に」

オールド 「秘密が好きなのだよ、弟が作家だったという事を最後まで隠していたからな。うまく騙されたもんだ。新作は順調か」

作家 「新作の秘密も兄に?」

オールド 「まさか」

作家 「ところであなたは」

オールド、花を供える

オールド 「ただ花を置きに来た男さ。あんたの大ファンであるのは間違いないが。なあ、

聞かせてくれ、次はどんな結末になる」

作家 「さあね、実を言うとエンディングは僕も迷っているんだ」

と、キディングが酒瓶を持って現れる

キディング 「最後はうんと笑えるもんがいい」

作家 「(オールドに誰だと目で尋ねる)」

オールド 「同じファンさ」

キディング 「(酒瓶をオールドに渡し、もう一本を作家に向ける) 先生も良かったら」

作家 「僕はいいいよ」

オールド 「そう言わず、君の兄に乾杯しよう」

作家、仕方なく酒瓶を受け取る

オールド 「(酒瓶を上げて) クエルバーバートンに」

作家 「それは僕だよ」

オールド 「でも残念だな、彼もきつと読みたかったはずだ」

作家 「兄は本なんて読みやしませんよ」

オールド、手にもつ封筒を向ける

作家 「それは？」

オールド 「実は俺にも続編のとおきのおきのアイディアがあってね、執筆の足しになると思うんだ」

作家 「それはいい。だけど遠慮しとくよ、報酬を払わないといけなくなるからね」

オールド 「あーそんなもんはいらん」

作家、早く済ませようと瓶を墓の前に置く。封筒を受け取り中に目を通す。
と、その中身に絶句して地面に放る

作家 「なんだよこれ」

オールド 「お前の兄は“その目で”実際に起きた事を見て書いてたんだ。だから、例外なくこいつも加えといてくれ」

作家 「・・・あんたは誰だ」

オールド 「老いぼれじゃない方さ」

キディング 「私は一応コメディアン」

オールド 「口を出すな、仕切るのは俺だろ？」

作家 「殺すのか」

オールド 「俺は若いはずなんだが体がおいつかなくてね、物忘れがひどくて今日は銃を置いてきちゃまった」

作家 「・・・」

オールド 「ガキは元気か」

作家 「・・・」

オールド 「それはいい、男はいつだって人を殺せるくらい強い方がいい。まあ、あんたじゃ無理だろうから、お前の代わりに俺が教えてやろうか」

作家 「ふざけるな」

オールド 「・・・そうか」

作家、二人から距離をとろうとする

オールド「安心しろ、もう会う事はない」

作家、携帯を取り出そうとする。が、その時である。咳が出て堪えようとするも収まらない

キディング、試験管をだした。

と、作家の目に酒瓶が映り、まさかとオールドを見る

オールド「お前らはよくやったよ、だがこっちも逃がしやしない。確かにXはイカしたエン

ディングだった。捕らわれた男は逃げたが結局別の殺し屋に殺される。なあ、

先生、こっちの世界から出ていけよ」

オールド、手を差し出しわざとらしく息を吹きかける。

作家、まるでその息に押されるように地面へ転げ落ちる。

そして、二人の殺し屋はやがて死ぬ作家を一つの作品の様に眺めている

全暗転

《Q — キュウ — END》